

セブ通信

フィリピン・セブ島北部
地域保健衛生事業の現場から

vol. 4



ボゴ事務所のスタッフ

2017. 1. 5 田村 由美

派遣要員の仕事

新年あけましておめでとうございます。フィリピンには12月になって2つの台風が来ました。クリスマスや年末年始も暑く、私は年末という実感がわかないまま年を越しました。日本にはある季節の変化や旬の食べものがないことも時間の流れを感じないものなのかと、不思議な感覚で過ごしています。さて、今回は趣向を変えて、フィリピンでの私の仕事内容についてお伝えしたいと思います。

病院と地域との違いと共通点

私はセブ島北部のボゴ市にあるフィリピン赤十字社（以下、フィリピン赤）の事務所を拠点に仕事をしています。ボゴ市は、みなさんよくご存じのセブ市から車で約3時間、日本で売っているフィリピンのガイドブックにも載っている比較的大きな街です。勤務時間は朝8時から夕方5時までで、パソコンに向かって時間が多です。地域保健活動の進捗状況をフィリピン赤スタッフに確認して報告書をつくり、今後の活動についてスタッフと話し合っています。

1か月の約半分は、事務所外での活動です。この事業では3人の地域担当スタッフが事業対象の15の村を分担して受け持っており、それぞれの村のボランティアの活動状況を見に行き、必要に応じて活動の支援をしています。私も彼女たちに随行し、一緒に地域の状況を把握し、事業がどのように進んでいるか、それに対するボランティアや住民の反応はどうかモニタリングしています。「日赤から派遣されています」と村の人に告げたり、時には活動がよりよくなるよう提案をすることもあります。

患者さんのほうから来てくれる病院と違って、地域保健活動では人々が暮らしている地域へスタッフが出かけていき

ます。看護師1年目の時に先輩から「答えは患者さんの中にある。それをどう引き出すかが、私たち看護師の仕事」とアドバイスをもらったことがあります。地域保健でも同じことが言えるのではないかと考えています。地域の人々が持つ力や答えを一緒に見つけることができるかもしれないと思い、いつもワクワクした気持ちで出かけています。

「伝える」ということ

それからもう1つ、意識してやっていることがあります。それは、赤十字や日赤の活動を少しでも多くの人に知ってもらえるように働きかけることです。

日本のみなさんに対しては、みなさんからいただいた救援金を使って、どのような活動が行われ、フィリピンの人々の暮らしがどう変わったのかお伝えしていきたいと思っています。地域の人々がいきいきと暮らしている様子や、フィリピン赤のボランティアやスタッフが地域保健に一生懸命取り組んでいる様子が伝わるように心がけています。新聞社の取材を受けることもあります。

フィリピンの人々に対しては、日本のたくさんの人々がフィリピンの人々に心を寄せ応援していることを知ってほしいと思っています。2013年の台風ハイヤンの際には、多くの救援金が集まりました。台風の被害を受けやすい日本という国に住んでいるからこそ、同じような状況で困っているフィリピンの人々の力になりたいと考えた方が多かったのではないのでしょうか。海の方こうにフィリピンの人々を支えたいと思っている人がたくさんいるということ、毎日の活動の中で伝えていきたいと思っています。



生まれたてのボランティアが・・・

地域保健活動が始まって間もない11月の、タピロンという村のボランティアの様子です。写真左のフィリピン赤スタッフとの間には大きな距離がありますが・・・（下へ続く）



1か月後には堂々としたプレゼンを！

12月上旬にはこのとおり。1か月の活動を経て、スタッフとボランティアの距離も、ボランティア同士の距離も近くなっています。すぐに大きな成果の見える仕事ではありませんが、こうした小さな変化を見逃さず、見守っていききたいと思います。